

船浮湾の戦争遺跡

大 城 将 保

はじめに

沖縄戦史に占める西表島の地位はあまり大きいとはいえない。「忘勿石」の記念碑に象徴される西表島避難民の戦争マラリアによる犠牲は有名であるが、“日米最後の戦闘”とか“鉄の暴風”といわれる沖縄戦の激烈なイメージと比べると一般の関心はきわめて希薄といわねばならない。

地上戦闘の経過という観点でみれば西表島は無風地帯に近く、それだけに戦史に登場する機会にとほしく、戦争体験に関する調査研究もきわめて少ないのが実情であるが、今回これを「戦争遺跡」という別の観点から観察してみると、沖縄本島や石垣島とは異なる興味深い資料が少なからず得られた。とくに沖縄最初の軍事施設として昭和16（1941）年夏に中城湾要塞とともに建設された船浮要塞は戦史のうえで重要なエポックを刻むばかりか、史跡としてみると、中城湾要塞がほとんど痕跡さえ残っていないのにたいして船浮の要塞跡は驚くほど保存状態がよく、往時の歴史を知るうえで貴重な史跡として価値が高いと認められる。

史跡保存の立場からする戦争遺跡の調査は、沖縄県教育委員会文化課において平成7年度から開始されている。県文化財保護条例の指定基準が改正されて「戦争遺跡」が史跡として指定される道がひらけたためである。現在は全県的な所在調査の段階であるが、とかく片隅におかれがちな西表島の戦争遺跡についても本格的な調査の照明が当てられることが期待されるので、ここでは主要な戦争遺跡と関連資料の存在について紹介しておきたい。

船浮要塞の概要

西表島西部の船浮湾に建設された船浮要塞は、沖縄本島の中城湾要塞とともに沖縄県に最初に構築された軍事施設として歴史的に重要な位置を占めるものである。

置県以来、沖縄県は郷土部隊（連隊）を持たない唯一の県であった。徴兵制度は本土よりかなり遅れて明治31（1898）年から施行され、徴兵事務を管掌する沖縄連隊区が設定され連隊区司令官が赴任したが連隊区に対応する常駐部隊である連隊は編成されなかった。県出身兵は県外へでて第6師団（熊本）管下の九州他県の連隊に入隊するしかなかった。昭和期に至るまでなぜ沖縄だけに郷土部隊が設置されなかったのか理由は明確ではないが、

歴代の沖縄連隊区司令官の報告書や意見書などで見るかぎり、沖縄県民は日支両属の歴史をもつがゆえに皇国臣民としての自覚が低く未だ一人前になっていないという軍部や政府の沖縄観が根底にあったことは容易に推察できる。昭和9年の石井虎雄連隊区司令官の意見書「沖縄防備対策」では、日清戦争時の親清派の動きを例にあげ満州事変後の現今の情勢においても沖縄県民が「敵側」に寝返る可能性が否定できないと指摘し、「憂ノ最大ナルハ事大思想ナリ」と断じている。同意見書は、南辺の護りとしての沖縄の軍事的位置の重大さを指摘し、県民に郷土防備意識を植え付けるために義勇隊を編成して軍事教育を徹底すべきだと提言しているが常備部隊の配備にまでは言及していない。沖縄連隊の編成などは時期尚早というより論外といった雰囲気を伺わせる。

常備部隊の駐屯もないぐらいだから防備施設（軍事基地）がないのは言うまでもない。防衛庁戦史の表現をかりれば、今次大戦の直前まで「沖縄県には軍馬一頭（連隊区司令官用）」の戦備しか持たないありさまであった。南辺の防備としては強大な台湾軍が存在し、大艦巨砲主義の観点からはあえて南西諸島の島嶼群に防衛施設を配備する必要を認めなかつたのであろう。沖縄本島を中心とする南西諸島が戦略的に重要視されるのは太平洋戦争末期に航空主力主義への転換が差し迫った課題となり、航空基地としての価値が認識されてからである。従って、南西諸島が本格的に軍事化されるのは昭和19（1944）年春になってからであり、一般にそれまでの沖縄社会は軍隊とも軍事基地とも縁のない空白地帯であったとみなされるが、ただひとつ例外的なのが、昭和16（1941）年に建設された船浮湾と中城湾の臨時要塞の建設であった。

奄美大島、沖縄本島中城湾および西表島船浮湾に臨時要塞を建設する構想は大正8（1919）年から計画され、対米有事に際は北海道から台湾にいたる列島線に臨時要塞を構築し敵艦隊および潜水艦隊を迎撃するための海軍作戦の拠点を確認するという戦略的な目的をもつものであった。しかし大正11（1922）年2月に締結されたワシントン海軍軍縮条約の防備制限条項の対象となって建設計画は中止された。日本はその後同条約を破棄するが要塞建設の再開はながく放置されていた。

この間に日本軍部は日中戦争の泥沼化からの脱却をはからんとして国策を南進政策に転換、東南アジア地域への侵攻作戦計画とともに同地域から石油などの軍需物資を運搬する輸送ルートを警備し支援するために臨時要塞建設計画が復活することとなった。

昭和16（1941）年6月、陸軍築城本部の軍用船が仲良港に入港、厳重警備のもとで内離島、祖納、外離島、サバ崎に上陸、要塞用地の接收を開始した。同年7月、臨時要塞建設命令が発せられ、8月に着工した。内離島に12ミリ速射カノン砲2門、サバ崎に38式野砲2門、祖納に38式野砲4門、探照灯などが設置されたほか、湾の周辺に多数の陣地壕が構築された。陣地構築作業には西表西部の住民が動員された。各集落に徴用が割り

当てられるほか、朝鮮人の炭坑夫や学童なども動員した突貫作業の結果10月にはほぼ工事を完了した。

9月には要塞司令部、要塞重砲兵連隊、陸軍病院などが編成されて配備についた。要塞司令部（司令官・下水憲次大佐）と陸軍病院は第1区の内離島におかれた。第2区の祖納には第2中隊、第3区の内離島に第1中隊、第4区のサバ崎にサバ崎守備隊が配置された。

その後若干の配置移動が続き、17年10月には外離島の北端に野砲4門、南端に野砲2門が設置され、祖納の探照灯もここに移設された。

要塞部隊の活動としては、陸軍病院がマラリア防遏所と協力してマラリア対策に乗り出した事ぐらいで特記すべきこともなく、太平洋戦争の戦局の悪化とともに南方輸送路の警備・支援という役割も解消し、昭和19（1944）3月の第32軍（沖縄守備軍）の創設とともに要塞部隊は軍の指揮下にはいり、要塞司令部は解消し、重砲兵連隊は重砲兵第8連隊と改称して米軍の沖縄進攻に備えて石垣島に移動して行った。

要塞は事実上閉鎖となったが後には、沖縄本島の第4遊撃隊から第4中隊（隊長・今村武秋少尉）のゲリラ隊が派遣されてきた。ゲリラ隊は八重山各離島から兵役適齢前の青少年を徴集して「護郷隊」約200名を編成し、敵上陸後のゲリラ戦を想定した訓練を続けていたが、実戦に至らぬうちに敗戦を迎えた。

なお、船浮湾の最奥に位置する船浮集落には要塞部隊とは別に海軍石垣島警備隊指揮下の少数の海軍部隊が配備されていた。震洋艇のものと思われる秘匿壕跡などが残存しているが船浮住民は要塞建設時に全員上原に強制移動をさせられたため目撃者もなく記録も残されていない。

遺跡と資料

中城湾要塞は与那原に司令部と陸軍病院を置き、津堅島と知念岬の砲台が湾を抱きかかえる形で構築されていたが、第32軍の編成とともに軍に編成され、陸軍病院および主力部隊は長期におよぶ激戦の末に壊滅した。同湾は戦後も米軍の要港として使用されたために湾岸一帯は基地整備によって大きく変容し、主要陣地の津堅島はじめ各地の要塞陣地の跡地には往時をしのぶ物的痕跡はほとんど見あたらない。

これに比べて、船浮湾の場合は、普段は訪れる人もなく草木に埋もれて忘れられた存在になっているが、それだけに半世紀をこえた今日に往時の原型をよくとどめている。

筆者が実見した遺跡は、祖納の砲座跡と船浮の海軍施設跡の一部にすぎないが、各所の野砲は石垣島に移設されたためコンクリート構造の円形台座（直径約5メートル）だけがほぼ原型のまま放置されて残っている。近年これらの戦争遺跡を保存しようという気運

が高まり各方面から調査の光があてられつつある。竹富町社会教育課、同町史編集室、県文化課の行政機関のほか石垣金星（県文化財保護指導委員）、池田豊吉（西表館館長）、大田静男（石垣市文化課）氏らの実地調査や聞き取り調査や資料収集が進みつつあり、既刊の調査報告書、戦史、文献資料集、写真資料集、資料館展示物などで確認される主なものだけでも次のような戦争遺跡がある。

- ①祖納上村の砲座跡 4基
- ②内離島の砲座跡 2基
- ③外離島の砲座跡 3基
- ④サバ崎の砲座跡 1基
- ⑤サバ崎の弾薬庫跡
- ⑥船浮の海軍壕跡
- ⑦同、海底通信施設跡
- ⑧同、貯水池および標柱
- ⑨同、特攻艇格納壕
- ⑩同、発電小屋跡
- ⑪同、弾薬倉庫跡
- ⑫祖納松山家の避難壕
- ⑬同、栗野家の避難壕
- ⑭白浜の住民避難所
- ⑮干立の住民避難所

以上のような戦争遺跡の建設時期や機能や使用例などを特定するうえで文献や写真やその他の関連資料は欠かせないが、近年になってその分野の成果も現れつつある。

- ①竹富町役場『竹富町史資料集①鉄田義司日記－船浮要塞重砲兵連隊の奇跡－』（2000）
- ②大田静男『八重山の戦争－マップで訪ねる八重山の過去・現在・未来』（1996）
- ③資料館「西表館」展示（池田豊吉館長、2000年開館）
- ④竹富町史編集室所蔵「鉄田義司関係写真集」
- ⑤竹富町教育委員会作成「祖納砲台跡実測図」

竹富町史編集室から発行された『鉄田義司日記』は船浮要塞に長年勤務した将校の4年余におよぶ個人日記をほぼ全文収録したもので、船浮要塞部隊の編成から解体にいたる全過程を見届けた貴重な人物の貴重な記録である。『鉄の暴風』で壊滅状態となった沖縄本島はもとより石垣島や宮古島でも類似するものは五指に満たない貴重な記録である。この日記が発掘されたのは昭和61（1986）年。当時西表島の白浜小学校で教鞭をとって

た城間良昭教諭が、教務のかたわら「西表島の戦争」をテーマに調査研究をすすめていたところこの日記の主の鉄田氏にめぐりあい日記を借用したことがきっかけで、鉄田氏の死後日記は出版を前提に城間教諭の手を経て竹富町史編集室に寄贈されたものである。出版構想から実現まで多くの曲折があって年月を経たが、資料集として出版されたこの日記には年数をかけただけの利用価値が多々ある。一つには、昭和16年の太平洋戦争勃発の年からはじまって昭和20年末の武装解除までを網羅するこの日記はそのまま沖縄戦とその前後の県内の動きを反映しており、西表島や石垣島のみならず沖縄全域の戦争体験の経過をたどるうえで年譜的な指標を与えてくれるものである。また、鉄田少尉は兵用地誌の研究のため軍務で八重山各地を巡回する機会があったため戦時下の八重山郡民の生活ぶりをよく観察しており同時代記録として貴重な情報を提供してくれる。さらに鉄田資料には日記のほかに当時の八重山の風物や軍隊生活を記録した写真資料が多数付属しており、戦時中の写真がほとんど見あたらない沖縄ではまれなる幸運というべきである。これらの写真を効果的に活用したのもこの資料集の特色である。軍人の日記をそのまま収録すればきわめて退屈な本になりがちのところ、本巻は日記本文の下段に余白欄をもうけ所要所で用語解説や写真および写真解説を散りばめてある。このため一般読者にも読みやすいし、欄外の記事や写真を通読するだけでも八重山の戦時生活の様子が伝わってくるように工夫されている。

最後に特記すべきは、巻頭に掲げられた26ページにおよぶ「解説」の部分である。解題的な解説のほかに、日記の記述内容を中心に各年度ごとの記録者の動向と背景となる戦況が簡潔にまとめられていて、これだけでも八重山地方の戦時生活の断面や変遷をたどることが出来る。

大田静男『八重山の戦争』は第1部「戦跡に立つ」、第2部「八重山の戦争」、第3部「資料編」の3部構成になっているが、第1部はガイドブックのスタイルで八重山全域の主なる戦跡が写真と地図と簡潔な文章で紹介されている。船浮要塞についても便利な案内書として利用価値が高い。この小文でも同書を参照した部分が多々ある。

2000年夏に開館した「西表館」は船浮在住の池田豊吉氏が自宅の一角に解説した“手づくりミュージアム”である。西表の自然・歴史・民俗に関するユニークな資料が展示されているが、なかでも池田氏が教職時代から執念をもって調査してきた船浮要塞と西表炭坑に関する資料や図説が筆者には大いに参考になった。

竹富町教育委員会社会教育課が作成した祖納上村砲台跡の測量は地元在住の石垣金星氏らののはからいで電話会社の助成をえて実現したもので、このような実測調査が今後船浮湾全域に拡大されることが期待される。

軍用地問題

船浮要塞に関して忘れてならないのは軍用地問題である。石垣島などの飛行場建設用地の場合は規模も大きく地域住民に目撃者も多く関心も高いが、船浮の場合は時期が古く状況も異なるのでややもすると見落としがちになる。しかし飛行場建設用地であれ要塞用地であれ、いずれも総動員法を適用した軍部の一方的な強制接収であったことに相違はなく今日に至るまで根本的な問題は解決していない。

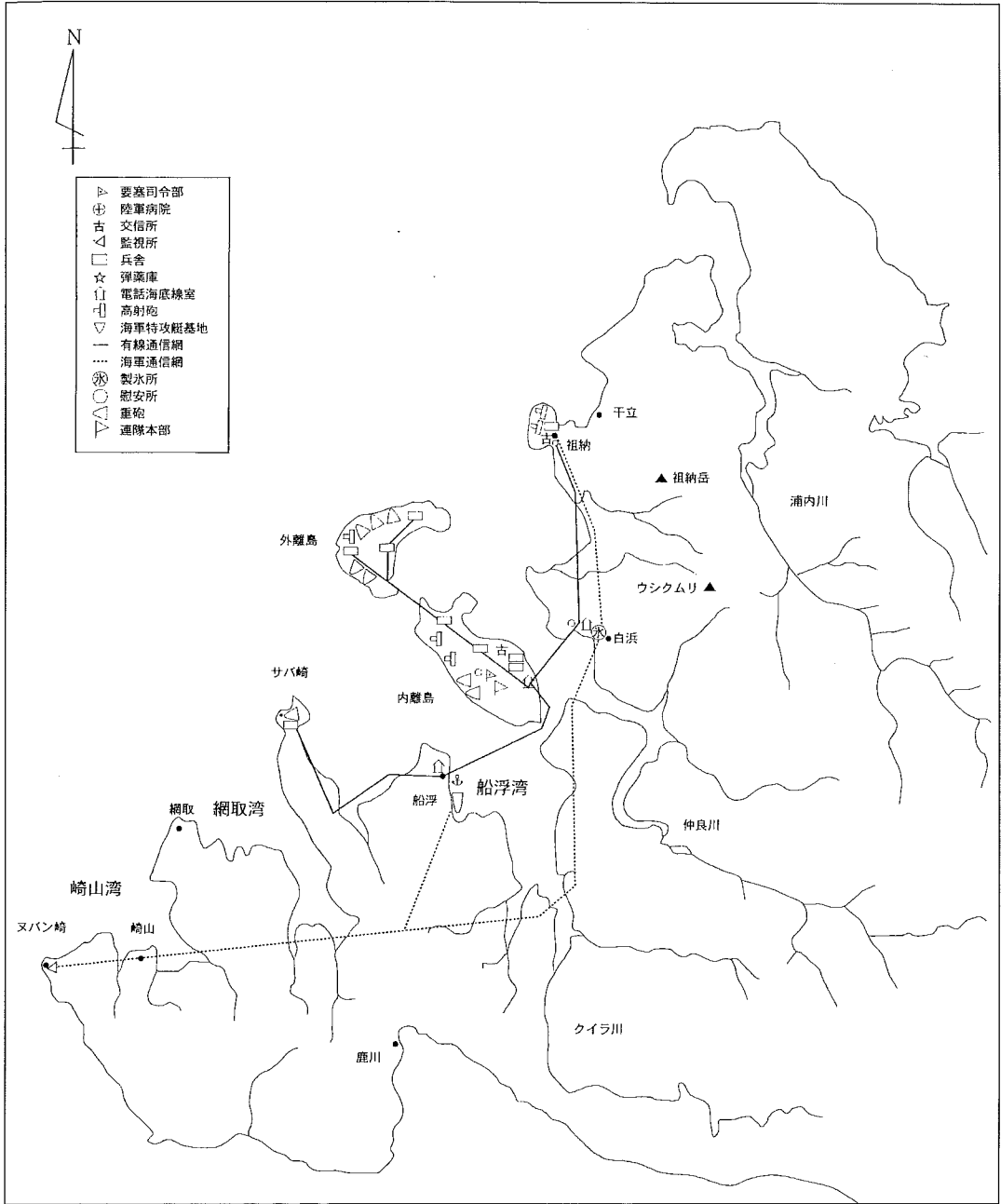
根本的問題とは、元の地主自身が「なっとくして土地を売り払った覚えはない」という一言につきる。実態は強制的な土地接収であったという。

昭和16(1941)年6月5日、陸軍築城本部船浮要塞支部の軍用船が湾内に出現、内離島、祖納、外離島、サバ崎に資材が陸揚げされ県下ではじめての軍事施設を建設するための土地収容がはじまった。要塞建設は軍事機密であるとの理由で村役場への通告もなく、要塞用地の地権者を西表国民学校にあつめて抜き打ち的に収容手続きを開始した。臨時要塞支部長から要塞建設のために用地が必要であるとの説明があり、地権者の応諾を問うこともなく土地売渡承諾書を提出させて手続きはあっけなく終了した。代金は3~4割が現金で支払われただけで、残金は強制的な国債購入にあてられ地権者が手にしたのはわずかな涙金であった。

戦時下のことで「戦争に勝つまでは」というのが一般的な空気であった。しかし戦後になって要塞が解消したあとも土地は帰ってこなかった。帳簿上は国有財産として登記されたままだった。それでも旧地主は自分の土地を耕して誰も疑問に思わなかったが、日本復帰後は国有財産として管理され、耕作者はもともと自分の土地でありながら国税事務所へ賃貸料を納めなければならなくなっている。ある農家では3年に1回約5万円の賃貸料を課されているという。不条理な感を拭い得ない状態である。

祖納上村砲台の一带は祖納の元島であり開闢神を祀る聖域になっている。村人にとって精神的拠り所であるこの地が戦時体制下の強制接収の結果をいつまでも続けていいものか部外者からみても疑問の残る問題であろう。

船浮要塞配置図



(竹富町役場『鉄田義司日記』より)